

子どもによる子どものためのお祭り

都城市子どもフェスティバル

小学5・6年生の子どもたちが企画から運営までのすべてを行った子どもフェスティバルが2月21日、ウエルネス交流プラザで開催されました。会場には、お化け屋敷やミニボーリング場、工作コーナーなどを設置。訪れた約1,500人の家族連れらは、趣向を凝らした手作りのお祭りを満喫していました。運営を手伝った市ジュニアリーダークラブ蒲公英の鳥越健太さん（丸谷町）は「多くの人に来てもらい、企画した子どもたちもほっとしたと思う」とイベントの成功を喜んでいました。



県内初の本格的家族湯が完成

かかしの里ゆぽづ家族湯オープン

山田町のかかしの里ゆぽづに家族湯が完成し2月26日、竣工式典が行われました。家族とのだんらんや介助が必要な人たちにも温泉を楽しんでもらおうと造られた家族湯。式典で長峯市長が「年間50万人の温泉客でにぎわう観光スポット。新たに家族湯が加わり多くの市民に楽しんでほしい」と完成を祝いました。オープン初日の3月1日には、完成を待ちわびた入浴客らが、さまざまな形の石風呂や坪庭など、12部屋すべてが趣の違う家族湯のすべすべした泉質を満喫していました。



いつまでも自分が輝くために

都城市生涯学習フェスティバル

日ごろの学習の成果を発表する生涯学習フェスティバルが2月27日と28日の2日間、ウエルネス交流プラザで開催されました。会場では、ちぎり絵やフラワーアレンジメントなど約750点の作品展示のほか、歌や踊りなどのステージ発表、ヨガの1日体験教室などが行われ、両日とも多くの人出でにぎわいました。今回初めて作品を出展した荷方美智子さん（一万城町）は「多くの人に見てもらい自信がついたので、これからも作品づくりを続けていきたい」と意気込んでいました。



お気に入りの本をいっぱい抱え

図書館まつり

読書に親んでもらおうと図書館まつりが2月28日、コミュニティセンターと図書館で行われました。恒例の図書ふれあいひろばには、市民から寄贈された児童図書や単行本など、約9,000冊を準備。家庭で不要となった本が希望者に配付され、詰め掛けた来場者は、自分が気になった本を一冊一冊手に取り確かめていました。西村幸子さん（大王町）は「旅行しながら、写真を撮るのが趣味で、その参考になる本がないか探しに来ました」と美術関係図書を何冊も抱えていました。





新鮮な春の味覚に舌鼓

高崎いちご祭り

高崎いちご祭りが2月28日、高崎総合公園大駐車場で開催されました。祭り前日の夜に収穫した新鮮なイチゴ「さがほのか」が市価の2割以上安く販売されるとあって、会場には早朝から家族連れなど約4,000人が来場。イチゴを使った大福やケーキ、地元で採れた農産物の販売なども行われ、買い物客は目当ての品物を求めて長い行列を作っていました。毎年訪れている長友怜音君（郡元町）は「イチゴがたくさん食べられるこの祭りが大好き」と満面の笑顔を浮かべていました。



住民による自主的なまちづくりがスタート

祝吉地区まちづくり協議会設立宣言式

住民が知恵を絞り地域を元気にしていこうと、新たなまちづくりへの取り組みが市内の6地区でスタート。そのうち、祝吉地区では3月5日、地元の地区公民館でまちづくり協議会設立宣言式が行われました。式典で、準備会議の立山静夫議長が「高齢者が安心して暮らし、子どもが元気で、心の通い合うまちにしましょう」と呼び掛けました。また、地元小中学生らが、未来の展望についてビデオレターで思いを伝え、最後に宣言文を参加者全員で唱和し、まちづくりへの思いを新たにしました。



たくさんのお別れをありがとう

四家小学校閉校式

四家小学校で3月7日、閉校式が行われました。これまでに2,129人を送り出した同校ですが、児童の減少に伴い閉校が決まったもので在校生や地区住民、卒業生ら476人が参加。運動会などの思い出を発表したり、参加者全員で校歌を歌ったりして100年の歴史を刻んだ四家小との別れを惜しんでいました。井之上大和くん（6年）は「廃校になるのは寂しい。だけど4月からは中学生になるので新たな気持ちで頑張りたい」と新生活に夢を膨らませていました。



共に手をつなぎ、共に歩もう！

みやこんじょ福祉まつり2010

みやこんじょ福祉まつりが3月14日、ウエルネス交流プラザを主会場に開催されました。まつりを通して福祉について考えてもらおうと、実行委員会が企画。さまざまな団体による歌や踊りの披露や出店のほか、点字などの体験コーナーも設けられ、多くの人が楽しみました。弟と一緒に点字名刺づくりを体験した上柳道歩さん（西小3年）は「このまつりで点字を初めて知りました。自分の名刺が点字できれいに作れて楽しかったです」と出来栄に満足していました。



人の風景



関之尾滝の魅力を伝える

関之尾むかえびとの会会長

おくだ
まさあき
奥田 正明さん

日 本の滝100選に選ばれている関之尾滝の魅力を多くの人に知ってもらおうと活動している関之尾むかえびと。その会の会長が奥田正明さん（69歳・大王町）です。

平成23年3月の九州新幹線鹿児島ルート全線開通を視野に「観光の目玉となるものをつくり、都城の魅力を発信しよう」と平成21年3月に会員を募集し、同年5月から活動をスター

トしました。会が発足して、1年弱。その間に案内した観光客は、1万人以上にも上り、会員は毎日のように関之尾むかえびとの法被を着込み、観光バスなどで訪れた人に関之尾の魅力をアピールしています。

関之尾むかえびとの名付け親でもある奥田さん。ヒントとなったのはアカデミー賞外国語映画賞を受賞した「おくりびと」。「名前の雰囲気もあるし、

これはいい」とそれをもじって「むかえびと」と名付け、会で提案したところ決定となりました。訪れた人たちをおもてなしの心で温かく迎え入れていこうという願いも込めた名前です。

発足当時は18人でしたが、現在は11人がボランティアで活動中。「内容を理解し、関之尾滝と一緒にPRしてくれる人を」と会の仲間を募集しています。「お客さんに関之尾の魅力や関

之尾にまつわる言い伝えを紹介することで、喜んでもらえる。

そして、訪れたいろいろな地域の人と話せるのが楽しい」と活動の魅力を話す奥田さん。

将来は、「認定に向けて取り組んでいるジオパークや都城島津邸などの地域資源と連携して、地域を盛り上げたい」とますます意気盛んです。

都城讃歌



【星月夜】

平良 一巳さん

滋賀県彦根市の街頭に、私の作品「さかな釣りをする少年」「たけうまにのった少年」「かざ車をもつ少女」があります。

川での水遊び・魚釣り・水草の中を通りぬける光・冷たさ・太陽の温かさ・霧島おろしの風・田んぼの天然スケート場・分厚い霜柱・友達（なぜか子どもの姿のまま）・遊び疲れのけだるさ・自転車であぜ道を走ったときのゴロゴロガタガタという振動など、五感を奮い立たせるす

平良一巳（たいらかずみ）

プロフィール

昭和28年生まれ。金属造形作家。昭和50年に工房「佐波理」を設立し、銅やステンレスを材料とした作品を造形。

べてが都城のやんちゃな子どもたちの時間のあります。この宝物がなければ作品は作れなかつたでしょう。

お金では得ることができない宝物、それはほかにありません。都城の「言葉」です。「魂葉」といつてもいいかも知れない。言葉は「魂葉」、魂、歴史や地域が積み上げた文化です。自分の中の一部であり他者へのつながり、温かさ、長い年月の結晶。帰省するたびに、降り注ぐ星の光に心を奪われ、さまざまな思いが作品を生み出す力になっています。



学校へ行こう

「元気いっぱい 有水っ子」

- 6年 上西窪 遥菜さん
- 6年 白谷 和香奈さん
- 6年 井手上ひかるさん



有水小学校は、花がいっぱいでたくさん自然に囲まれています。学校から見える高千穂峰の姿は、とても美しいです。全校児童は107人で、昼休みは学年関係なく、だれとでも仲良く遊び、みんな元気いっぱいです。

私たち5・6年生は、毎朝ボランティア活動を行っています。ごみのある所を見つけては、進んできれいにしています。

有水小の自慢は、静かに掃除ができることです。掃除始めのチャイムが鳴ると、整列して目を閉じます。学校全体がチャイムとともに静かになるので、「掃除を頑張るぞ」という気持ちになります。掃除中には、話

し声は聞こえません。

また、「鉦踊り」という郷土芸能があります。代々、5・6年生を中心に受け継がれ、毎年神社に奉納したり、運動会で披露したりしています。

有水小の合言葉は、「元気・根気・みんな好き・あいさつ・返事」です。そして、いつでも笑顔で生活しようと心掛けています。これらの合言葉の下、みんなで協力して自慢できる学校になるように、私たち6年生はこれからも頑張っていきたいと思えます。



◎学校のシンボル
【大きなイチヨウの木】

運動場にあるこの木は、秋になると黄金色に変わります。葉が舞い散るときは特に美しく、子どもたちは大喜びです。